

方向

第一七二号 一九九五年六月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

李賀歌詩編

(訳注稿 七)

原田憲雄

(一〇二四—一〇三六)

十一月寒未辞許 (つづき)

十二月寒辞并閏月

六月

(一〇二九) 六月

生絹裁ち

〇二 裁生羅

湘江の竹きり

〇三 伐湘竹

朝霜のネグリジェで碧玉のベッドに横たわる美女

〇四 帔拂疎霜簾秋玉

炎炎と真紅の鏡が東方にあらわれて

〇五 炎炎紅鏡東方開

コロナの車輪が天上を駆けまわる

〇六 暈如車輪上徘徊

ピシリ ピシリ 赤帝が竜に鞭うちやって来たのだ

〇七 啾啾赤帝騎龍來

〇一 (生羅を裁ち)

・生羅 すずし、すなわち生糸で織ったうすい絹。裁って第三句の帔を作る。

〇二 (湘竹を伐り)

・湘竹 湘江の斑いりの竹。伐って簾を作る。李憑箜篌引(一〇〇一)参照。

〇三 (帔は疎霜に払て

簾は秋玉) ・帔拂疎霜 帔はうちかけ。拂は近似する。疎霜はあらい霜。霜を

おいたように真っ白なネグリジェを、女性が着る。・簾秋玉 竹の皮を編んだ筵が簾で、秋の碧玉のようにひいやりしている。ベッドに敷く。曾益は、楊貴妃が初めて進見したとき玄宗が「玉竹氷紋簾」を授けた、という『楊妃外伝』の話を引き。楽史の本を指すなら、李賀より一世紀後の人だから典拠にできないが、似た口碑が賀のころにあったのなら、この注にはびつたりである。

○四 炎炎 紅鏡 東方に開け) ・炎炎と燃えさかる紅い鏡のような太陽が東方から上る。劉楨「赫赫炎炎」(大暑賦)

○五 暈 車輪の如く 上に徘徊す) ・暈 日のまわりに生じる薄い輪。

○六 啾啾 赤帝 竜に騎つて来たる) ・啾啾 鳴き声の形容。楚辞「玉鸞の啾啾たるを鳴らす」(離騷)ここでは竜に鞭をあてる音ととった。・赤帝 五天帝のひとつりの炎帝で、南方と夏を司り、祝融氏。山海経は「南方祝融、獸身人面にして兩竜に乗る」(海外南経)という。それならいよいよ妙で、灼熱した獸身をひっさげて馳せてくる神が、これから何をしようとするのかは、改めて説くまでもないであろう。

七月

星は 雲の渚で 冷たく

露が 盤中に滴って 円い

うるわしい花 梢に咲きそめ

おとろえた蕙蘭 ひとけない園に愁う

(一〇三〇) 七月

○一 星依雲渚冷

○二 露滴盤中圓

○三 好花生木末

○四 衰蕙愁空園

夜空は 宝玉を撒いた石だたみ

池のはちすも さながら青銅の鏡

舞い衣 すこし薄すぎ

竹のむしろ もう肌寒い

さっと吹きはじめた 暁の風

北斗は 燦爛と光り傾いて

〇五 夜天如玉砌

〇六 池葉極青鏡

〇七 僅厭舞衫薄

〇八 稍知花簾寒

〇九 暁風何拂拂

一〇 北斗光闌干

〇一「星は雲渚に依って冷え」・雲渚 天の河の雲の渚。賀の友の沈亞之が後に七夕を祭る文にこの語を使っている。白居易の詩にも同じ語があるが地上の「雲のかかった渚」で意味が違う。

〇二「露は盤中に滴って円かなり」・露滴 梁武帝「墜露珠を散らして円かなり」（遊鍾山大愛敬寺）

・盤 青銅の露盤。仙人掌という形のものでろうという説があるが、そこまで限定する必要はない。

〇三「好花 木末に生じ」・好花 好もしく麗しい花。何でもない言葉のようだが、賀の造語ではないか。

・生木末 木末は梢。楚辞「芙蓉を木末に攀る」（九歌湘君）傅玄「芙蓉木末に生ず」（怨歌行）

〇四「衰蕙 空園に愁う」・衰蕙 おとろえた蕙蘭。三月（一〇二六）参照。蕙を朝鮮本は「黄」とするが、誤り。

・空園 ひとけのない園庭。王微「野雀空園に満つ」（雜詩）王勃「空園独酌を歌う」（郊輿）空を楽府詩集などの注に「故」とするが、よくない。

〇五「夜天 玉砌の如く」・夜天 北魏の元朗墓誌銘に「寂寥たる玄戸、夜天を如何」の語があるそうだが、賀が知っていたかどうかはわからない。

・玉砌 法苑珠林「玉砌に臨んで暁かと疑う」（三五

燃燈篇) 駱賓王「霜に似て玉砌に明るし」(望月有所思)

○六〔池葉 青鏡を極む〕・池葉 池の蓮の葉。・極青鏡 青銅の鏡に極似する。杜甫「溪に点じて

荷葉青鏡を疊む」(絶句漫興九首九) 蓮が極めて大きくなったとする注釈が多いが、反対に、鏡をばら

まいたように小さく見えるのだ。遠く高いところから見下ろしているからである。

○七〔僅かに厭う 舞衫の薄きを〕・舞衫 舞いごろも。陰鏗「花は落つ舞衫の前」(侯司空宅詠妓)

○八〔稍知る 花簾の寒きを〕・稍知 王僧孺「稍知る玉釵の重きを、漸く見る羅襦の寒きを」(徐僕

射妓) ・花簾 竹むしろで花の模様を織り込んだもの。子夜「反覆す花簾の上」(四時歌)

○九〔暁風 何ぞ払払たる〕・拂拂 ひゅっひゅっ、という風の音。吳融「霏霏拂拂又迢迢」(秋色)

○一〇〔北斗 光 闌干〕・闌干 星のきらめくさま。また傾くさま。古楽府「北斗闌干」沈約「光斗闌

干として去る」(夜夜曲)

・酒気に熱した宴席を逃れ、楼上の露台に出た舞姫が、思いがけなく見出だした、静かに美しい夜景を歌ったような詩である。

八月

夫を亡くした女性は長い夜を怨み

孤独な旅人は家に帰る夢をみる

のきばたで蜘蛛は糸をつむぎ

壁ぎわに燈心の花がうなだれている

(一〇三二) 八月

○一 嬌妾怨長夜

○二 獨客夢歸家

○三 傍簾蟲網絲

○四 向壁燈垂花

簾の外が月の光でぱっと明かり

簾の内では樹の影が斜めだ

ゆらゆらゆれている露のさま

点々とちりばめられた池のはちす

〇五 簾外月光吐

〇六 簾内樹影斜

〇七 悠悠飛露姿

〇八 點綴池中荷

〇二 「孀妾 長夜を怨み」 ・ 孀妾 寡婦と同じ。孀を樂府詩集などの注が「宮」とするが、誤り。鮑照

「寒機に孀婦思ひ、秋堂に征客泣く」(和王義興七夕) ・ 長夜 全唐詩などの注が「夜長」とする。

陶淵明「褐を披て長夜を守る」(飲酒) 梵語の *dirgha-rātram* (永続する夜) が、仏典に漢訳される時、

この語が当てられてから、単純だった「長夜」が、さまざまのニュアンスをふくむ磨かれたことばとな

った。・八月は中秋。月の清くうるわしい季節である。多くの人は美景を追って楽しむだろう。だが、

夫を失った女にとっては、長い夜の肌さぶしい冷ややかさは、耐えがたい。

〇三 「独客 家に帰るを夢む」 ・ 獨客 月の照らす夜が旅人にことに淋しく、ふるさとの家に帰ること

を頻りに夢みることは、古今の詩人の歌うところ。

〇四 「簾に傍って 虫 糸を緝ぎ」 ・ 傍簾 軒のあたりで。 ・ 蟲 蜘蛛。 ・ 緝絲 緝を樂府詩集な

どの注が「織」とする。巢を掛けているのが糸を紡いでいるように見える。軒に蜘蛛が巢を掛けるのは、

恋しい人が帰るしるしと信ぜられたことは、権徳輿の「玉台体」や、古今集の「わが背子が来べき宵な

りささがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」によって知られる。だがすでに来るべき人を失った女にとっ

ては、その振舞が、嘲りにもみえよう。

○四〔壁（壁）に向かつて 灯 花を垂る〕 ・ 向壁 壁を他本がみな「壁」としそれがよい。左思「涙を掩って俱に壁に向かう」（嬌女） ・ 垂花 灯心が燃えるにしたがって先端の燃えかすが膨らみ光が暗くなる。その膨らみを缸花とも灯花とも称し、日本では丁子頭ちようじがしらという。暗くうなだれているように見えるのを花を垂る、という。夢にふるさとに帰っても、愛する人の見えぬうちに醒めてしまった旅人が、それ以外には対するものもない壁に、消えそうになった灯の影をみつめる侘しさ。この句はそれを歌う。

○五〔簾（簾）外 月光 吐き〕 ・ 簾外 簾を宋蜀本などが「簾」とし、それがよいだろう。

○六〔簾内（中） 樹影 斜めなり〕 ・ 簾中 中を錦囊集などが「内」とし、それがよいだろう。

・ ふいに、簾の外に円い大きな月があらわれ、簾の内側に樹の影が斜めに傾く。簾屈したたましいの眼前に、山越の弥陀があらわれて、かれを孤独から解き放ったかのような、美しい一聯である。

○七〔悠悠 飛露の姿〕 ・ 悠悠 張衡が「悠として以て容裔」（東京賦）というように、露が風に從ってゆらゆら揺れているさまだが、詩経に「悠悠たる蒼天、これ何人ぞや」（王風黍離）というように、空間と心理の両面での遠隔をも含んでいて、孀婦や獨客の悲しみとは何の関わりもなげに、広い庭一面に、露がゆらゆらと美しい、といったところであろう。

○八〔点綴す 池中の荷〕 ・ 点綴池中荷 池の面にちりばめられた蓮よ、というほどの意。謝朓「風は池中の荷を碎く」（治宅）

九月

離宮に螢散り 天は水を流したようだ

(一〇三二) 九月

○ 離宮散螢天似水

竹黄ばみ池冷やかで 芙蓉は死んだ

〇二 竹黄池冷芙蓉死

月は 空に綴じた門鐙の座がね まじまじ光り

〇三 月綴金鋪光脈脈

すずしい苑庭にひとけなく ほの白い空

〇四 涼苑虚庭空澹白

ひたひたと露おく花 さやさやと草わたる風

〇五 露花飛飛風草草

翠の錦 乱れきらめき 層道に満ちあふれ

〇六 翠錦爛斑滿層道

時告げる鶉人の声やんで すきとおる暁

〇七 鶉人罷唱暁瓏瓏

鴉が啼く 黄金の井戸にばさと落ちる 桐の葉

〇八 鴉啼金井下疎桐

〇一〔離宮 螢散って 天 水に似たり〕 ・離宮 めったに見なくなった螢が、この離宮ではあちこち

に明滅し、夜空は水を流したようだ。班固の「西都賦」に「離宮別館三十六所」という。東都すなわち洛陽付近にも離宮が多く、昌谷に近い福昌宮もその一つ。この詩の離宮がそれかどうかはわからぬが。

・螢を蒙古本が「螢」とするが、誤り。

〇二〔竹黄ばみ 池冷え 芙蓉死す〕 ・竹黄 竹の葉は黄ばみ、池は冷ややかで、芙蓉はすでに枯れている。やはり韓愈の弟子の張籍に「江清く露白く芙蓉死す」（吳宮怨）があるが、賀の作とどちらが早い

いかは分からない。 ・蓉を毛氏本が「容」とするが、誤り。

〇三〔月は金鋪を綴って 光 脈脈〕 ・金鋪 宮殿などの門の扉には竜や獅子の頭を象ったノッカーを

つけるのが例で、これを獸環あるいは門鐙といい、その環をつけるための円い金色の座金を金鋪という。ここでは円い月が金鋪みたいに空に綴じつけられて光っている、というのだ。司馬相如「玉戸を擠いて

以て金鋪を撼るゆすぶ」(長門賦) さきに七月(一〇三〇)の第五句の注に引いた法苑珠林の「臨玉砌而疑曉」

の直前の句が「金鋪を睇みて以て夜を忘る」・脈脈 還自會稽歌(一〇〇三)にもあったが、ここでは

月の光りが波打つように輝いていること。・光を黃評本が「花」とするが、誤り。

〇四 「涼苑りやうえん 虚庭きょてい 空は濃白たんばんく」・涼苑 苑庭は凄涼として人の気配もなく、空はしらじらとしている。

涼を宋蜀本などが「涼」とする。・賀は古典をよく攝取した詩人だが、また極めて独特な用法や造語

にも富み、後代の詩詞の作者たちに語彙を提供する。涼苑や虚庭もどうやらそれらしい。

〇五 「露花ろか 飛飛ひひ 風かぜ 草草そうそう」・露花 花にしとどにおいた露、草をなびかせてそうそうと渡る風。露

を蒙古本などが「霜」とする。よくない。・飛飛 ひらひらと飛んだり揺れたりする形容。梁の武帝

「飛飛双蛺蝶」(古意二首二) 唐の太宗「柳に泛あふれて飛飛たる絮」(喜雪)・草草 草から草へと風

がさやさや渡って行く形容。詩経「勞人草草」(小雅巷伯)のように心を勞するさま、あるいは「怱怱」

の意に使われるのが普通だが、賀のここでの用法は独特である。

〇六 「翠錦すいきん 爛斑らんぱん 層道そうどうに満つ」・翠錦 みどり地の錦。くさむらに花が咲き乱れているのをこうい

った。錦を朝鮮本は「鋪」とするが、誤り。・爛斑 きらきらと乱れ輝くさま。宋蜀本が「斑爛」と

し、蒙古本が「爛班」とするが、ともに誤り。ただ賀の愛読したと察せられる『拾遺記』には「玉梁の

側には斑爛あり」(岱輿山)とあって、賀がこの詩を作るのに暗示をうけているかも知れぬ。・層道

道が重層して見えるのであろう。複道あるいは閣道だとする説もある。

〇七 「鶏人けいじん 唱となえ罷やんで 曉あかつき 瓏ろうそう瓏」・雞人 時刻を告げて廻る役人。ニワトリの頭を象った頭巾を被

っていたらしい。・瓏瓏 あかるいさま。瓏を蒙古本などが「聰」とするが、誤り。

○八〔鴉からす啼ないて 金井きんせいに 疎桐そとう下くだる〕 ・金井 井戸の美称。ただ金色の井戸、あるいは堅固な井戸などの意で使われることもあり、文脈の中で判断するほかない。 ・疎桐 まばらになった桐の葉。

十月

(一〇三三) 十月

宝玉の水時計の銀の箭は動きが鈍ってきたらしい

○一 玉壺銀箭稍難傾

燈心の花が夜なかに笑う 駭おどったり明るくなったり

○二 缸花夜笑灑幽明

霜くだけ斜めに舞って薄絹の幕につき

○三 碎霜斜舞上羅幕

二列にならんだ灯籠が闇道を照らしています

○四 燭龍兩行照飛閣

真珠のとばりの床にねて悲しみに眠れぬひとの

○五 珠帷怨臥不成眠

金の鳳凰の刺繡したネグリジェが肌に寒くて

○六 金鳳刺衣著體寒

長い眉が三日月とうねりぐあいの競争です

○七 長眉對月鬪鸞環

○二〔玉壺ぎよこ 銀箭ぎんせん 稍や傾かき難くく〕 ・玉壺 宝玉で飾った水時計。またその水を受ける壺。柳楨に「玉壺夜惜情」で始まる「長門怨」という楽府がある。漢の武帝が少年時代から愛して結婚し、後に疎んじて長門宮においた陳皇后の悲しみを歌う。 ・銀箭 玉壺の水に挿入して時間を示す目盛りを刻んだ箭で、その浮き上がり方で時間を知る。近代の時計の針に当たる。 ・稍難傾 夜が長くなったのを、箭の動きが鈍くなったためかと、ひねった言い方をしている。宋之間が「銀箭をして晝あけしむる莫なく、為なになるなくせ合あひの杯」(寿陽王華燭図)というのは、新婚の人たちのために、時計の針よ、この夜の時間

を凍結して暁を来させるな、といっているのだ。長門宮のヒロインのように、愛する夫から捨てられた女性にとっては、孤独の夜なんぞさっさと過ぎ去って、はやく朝になってほしいのに……。

〇二「缸花 夜笑って 幽明を凜らす」・缸花 丁子頭。「八月」(一〇三一)の注参照。離別の種々

相を「別賦」に述べた江淹が「冬缸凜って夜何ぞ長き」という。愛の歎びの中にいる人は灯火の存在など意識もしない。その明暗に目を止め、あたしをあざ笑っている、などと気を回すのは、愛を失った人だけだ。缸を曾益などが「缸」とするがよくない。

〇三「碎霜 斜めに舞って羅幕に上る」・碎霜 碎け散った霜。張籍の「楚宮行」に「玉階の羅幕微かに霜有り」と歌うのは続く句に「この夕べ楽しみ未だ央ならず」というように、長夜の宴の前触れだが、

ここのはその反対で、薄絹の幕に上った霜はそのまま氷りつき、宮殿を冬宮としてしまおうだろう。

〇四「燭竜 両行 飛閣を照らす」・燭竜 竜の飾りのある燭台。楽府詩集などは「燭籠」とする。それなら覆いを被せた燭台。張籍の同じ詩の「燭籠左右に列りて行を成す」は大国に成り上がった国王の行列をみずから照らす火だが、ここのは、飛閣(閣道)、しかも誰も来ずこちらからも行くことのない

通い道の、空しさを照らす燈籠なのだ。

〇五「珠帷に怨臥して眠りを成さず」・珠帷 真珠のカーテンで囲ったベッド。そのような豪華のうち

に住むことは人の羨むところではあるが、さて幸福であるかどうか。怨を「夜」とし「穩」とする本のあることを王琦が注するが、よくない。

〇六「金鳳の刺衣 体に著きて寒し」・金鳳刺衣 金糸で鳳の模様を刺繍した寝衣。

〇七「長眉 月に対し 鸞環を闘わす」・長眉 いつまでも眠れない女性が窓辺で月を見る長い眉。

・鬮環 その眉は、まるで三日月とうねり具合の競争をしているようだ。悲しい歌だが、それをピエロのうたう唄のように滑稽仕立てにした。鬮環を毛氏本が「鬮環」とするが、誤り。

十一月

(一〇三四) 十一月

宮城をとり囲み 凛凛と厳めしい冬の光

○ 宮城圍廻凛殿光

真っ白な天からは さらに砕け落ちる瓊玉の花

○ 白天碎碎墮瓊芳

鐘や太鼓を打ち鳴らし 飲もうじゃないか千日の酒

○ 鐘高飲千日酒

底冷えの寒さに対抗 君のおんため万歳三唱しはしたものの

○ 戰却凛寒作君壽

お濔の水は凍てついて しらぎぬを環にしたみたい

○ 御溝冰合如環素

火吹き井戸やら温泉の話は聞くが 何処にあるのやら

○ 火井温泉在何處

○ 「宮城 圍廻 嚴光 凛たり」 ・ 圍廻 ぐるりと取り囲む。「屏風曲」(二〇九〇)にも「圍廻六

曲膏闌を抱く」の例がある。官板などが「圍廻」とする。・この句、目に触れた冬景色をうたったものだろうが、冷たくなって男を寄せつけようとせぬ貴女のさまとも聞こえぬことはない。

○ 「白天 碎碎 瓊芳を墮す」 ・ 白天 ふつうは西方の天をいうのだが、ここのは文字どおり白い天。

・ 碎碎 さらにさらさらと砕けるように。動詞や名詞を重ね、疊語とし、形容詞や副詞としての新鮮な使い方をするのが、李賀の詩の一特色だ。これもその例。・ 瓊芳 楚辞に「なんぞ瓊芳を把らざる」(九

歌東皇太一)というのは花の美称だが、ここのは白玉の花のような雪の意。

○三「鐘（鍾）を過（つ）って高飲（こういん）せん 千日の酒」・過（つ）鐘 鐘は底本では木偏（もくへん）のようにもみえるが、手偏（てへん）であろう。鐘は酒の壺（つぼ）あるいは杯（は）で、それでも通るが、錦囊集（きんなんしゅう）などに従（したが）って「鐘」とした。鐘とはいっても鐘鼓（しょうこ）をあわせていう。岑参（せみさん）「軍中酒を置いて夜鼓（やこ）を過（つ）」（与独孤渐道别）の鼓（こ）がそうであるように。

・高飲 意気高く飲む。王维（わい）「夫君（た）は第（た）高飲（こういん）」（济州過趙叟家宴）・千日酒 中山（ちゅうしん）の酒家に、一口（ひとくち）飲むと千日（せんじつ）の間（ま）酔（よ）いを保（たも）つ酒（さけ）があった。劉玄石（りゅうげんせき）という男（おとこ）がこれを試（こ）して家（いへ）に帰（かへ）り、酔（よ）って寝（ね）た。いつまでもたっても醒（さ）めないの（ので）家人（かじん）は死（し）んだものと思（おも）い葬（まう）った。三年（さんねん）たち、酒家（さけい）の主（ぬし）が思（おも）いだし、劉家（りゅうけ）を訪（ま）ね、事情（じきやう）を聞（き）いて塚（つか）を開（ひら）くと、「ああいい気持（きもち）ちだ（つ）た」と伸（の）びをして玄石（げんせき）が起（た）きあが（つ）た（博物志）

○四「凝寒（ぎやうかん）を戰却（せんきやく）（却天）して 君（きみ）が寿（じゆ）を作（な）す」・却天 宋蜀本（そうしやくほん）などが「戰却」とし、それがよい。追（お）い退（ひ）ける、というほどの意（い）。・作君寿 君（きみ）の万歳（ばんざい）を祝（いわ）す。君（きみ）は「宮城（みやぎ）」の主（ぬし）だ（ら）う。

○五「御溝（ぎょこう） 氷（ひよう）（泉）合（ごう）して環素（かんそ）の如（ごと）し」・泉合 泉（いづみ）を宋蜀本（そうしやくほん）は「水」とし、樂府詩集（らくふししゅう）の注（しゆ）は「氷」とする。氷合（ひようご）がよい。凍（こ）てつくこと。「北中寒（ほくちゅうかん）」（四一八五）にも「黄河（くわは）氷合（ひようご）して三方（さんぱう）死（し）す」

○六「火井（かせい） 温泉（おんせん） 何処（いず）かに在（あ）りや」・火井温泉 謝惠連（しゃゑいれん）が「火井滅（め）び、温泉（おんせん）氷（こ）る」（雪賦）といい、博物志（ぶつぶつし）によれば、臨邛（りんきやう）にある火井（かせい）は、諸葛孔明（しよかくけいめい）が往（ゆ）つて觀（み）たのち、火（ひ）がよいよ盛（も）んになり、盆（ひら）に水（みづ）を入れて煮（に）ると塩（しほ）ができた。後（のち）に人（ひと）が火（ひ）を投（な）げ入（い）れたところ、火井（かせい）の火（ひ）は消（き）えて、燃（も）えなくな（な）った。華陽国志（くわやうこくし）によれば、邛都（きやうと）の温泉（おんせん）は、冬（ふゆ）夏（げ）ともに熱（あつ）し、鷄（けい）や豚（とん）を煮（に）うる程度（ていど）で、下流（げりゆう）に浴（ゆ）すると疾（しやく）病（びやう）は治（ち）癒（ご）した。「雪賦（せつふ）」にもい（い）うように、大雪（たいせつ）は瑞祥（ずいしやう）とさ（さ）れる。「作君寿（さくきんじゆ）」もそれ（それ）をきかした（した）の（だ）らうが「どこにある（あ）るの（の）やら」と他（た）を顧（か）みる口（くち）振（ふ）りは、冷（ひや）たくな（な）った女（おんな）に与（よ）える歌（うた）とす（す）れば絶妙（てつめう）だが、また諷諭（ふうよん）の気味（きみ）がほのめか（め）かないもの（もの）でも（でも）ない。

十二月

(一〇三五) 十二月

太陽の淡い光がさんさんとくれないそそぎ

○一 日脚淡光紅灑灑

薄霜は木犀の下枝に消えのこってはいるもの

○二 薄霜不銷桂枝下

かすかな和氣がきびしい冬の凍てを押しつけ

○三 依侖和氣排冬嚴

どうやら日長になりはじめ長い夜とはお別れらしい

○四 已就長日辭長夜

○二 「日脚の淡光紅灑灑」 ・日脚 ひかげ。岑参「雲開いて日脚黄なり」 (送李司諫帰京) ・灑

灑 絶えず注ぐさま。

○三 「薄霜 銷えず 桂枝の下」 ・薄霜 うすじも。沈佺期「薄霜上路を沾らす」 (扈從出長安)

桂枝 謝朓「霜下って桂枝銷ゆ」 (芳樹)

○三 「依侖たる和氣 冬嚴を排し」 ・依侖 かすかなさま。侖を錦囊集などが「稀」とする。意味は同

じ。 ・排 宋蜀本などが「解」とする。

○四 「已に長日に就いて長夜を辞す」 ・長日 日永のこと。長夜は「八月」(一〇三二)の注参照。

閏月

(一〇三六) 閏月

帝徳の重なるように

○一 帝重光

年にも月が重なって

○二 年重時

七十二候がひとまわり推移したのに

○三 七十二候廻環推

天文官のつかさどる玉律の灰が吹き余り

今年のなんと長くって 来る歳の遅いこと

西王母どのが長寿の桃を天子に献じ

日輪の御者の義氏和氏が竜の手綱をゆるめたためか

○四 天官玉瑠灰剩飛

○五 今歳何長来歳遅

○六 王母移桃献天子

○七 義氏和氏迂龍轡

○一〔帝 光を重ね〕 ・帝重光 文王について武王という聖徳すぐれた帝王を国の初めに持った周の光榮を書経は「重光を宣ぶ」としるした。

○二〔年 時を重ね〕 ・年重時 そのように一年も月を重ねて閏月とするのか。年を毛氏本などが「午」とするが、誤り。

○三〔七十二候 廻環して推み〕 ・七十二候 陰曆では一年を二四氣に分け、一氣を三分するので、七十二候となり、一候は五日で、あわせて、三六〇日。その余りを貯えておいて、ほぼ五年に二度、閏月をおく。 ・廻 楽府詩集は「回」とする。 ・推 蒙古本は「催」とする。

○四〔天官の玉瑠 灰を剩飛す〕 ・天官 氣候の推移を観測するために天体氣象観測官がおかれていた。これが天官。密室中に一二箇の玉律と称する管を置き、葭の灰を管につめる。玉律の長さは一二か月の節氣と対応していて、その節氣に感じると灰が自然に飛散する。しかし閏月の分は飛び余ったのか。天官玉瑠を錦囊集は「天宮律瑠」とし、毛氏本の注は「天宮街瑠」とする。

○五〔今歳 何ぞ長く 来歳 遅きや〕 ・わが古今集の在原元方の「こそとやいはむことしとやいはむ」を連想させるが、賀のほうが元方より早い。

○六 「王母 桃を移し 天子に献じ」 ・王母移桃 漢武外伝によると、七月七日に仙女の西王母が降下する。侍女が三千年に一度なるという桃を七つ王母に捧げる。王母は四つを天子に与え三つを自分が食べる。たいへん甘美だったという。

○七 「義（儀）氏 和氏 龍轡を迂べしか」 ・儀氏和氏 轡を宋蜀本などが「義」とし、それがよい。義氏と和氏は、書経では、堯のときの天文官とされ、淮南子などの伝える義和は、日輪を六竜に挽かせる御者とされる。ふたつは別だというのが伝統的な経学だが、日輪の御者の義和が古い神話で、それを経学者が勝手に体系化した。ここでは日輪の御者の義さんと和さんが手綱をゆるめたので、竜の足がのろくなり、日輪の運行が遅れるのかと、だだっ子めいた問い方をしている。

(一〇三七)

天上の謡

天上謡

〔天上の謡〕 ・李賀が銀河鉄道の急行に乗って天上世界を一巡した、といった趣向の作。その天上は道教的な仙界で、「夢天」(一〇二一)と共通した表現がみえる。

(一〇三七)

○一 天の河は夜回転しめぐる星を漂わせ

○一 天河夜轉漂廻星

銀のなぎさに流れる雲 水声を模倣する

○二 銀浦流雲學水聲

月宮の木犀の樹は花まだ落ちず

○三 玉宮桂樹花未落

仙女は香草を採って帯びものとする

秦の王女 簾を巻けば 北窓は暁

窓の前に植えた桐には青い小さな鳳凰

王子喬 鵝鳥の首より長い笙を吹き

竜を呼び煙を耕し瑤草を植えさせている

朝焼けの紅綬をおびた蓮系のスカート

青洲を散歩して蘭の花をひらう春

東の方を指させば羲和が巧みに馬走らせ

乾いた海に新しい砂塵が上がる 石山のもと

○四 仙妾採香垂珮纓』

○五 秦妃卷簾北牕曉

○六 牕前植桐青鳳小

○七 王子吹笙鵝管長

○八 呼龍耕煙種瑤草』

○九 粉霞紅綬藕絲裙

一〇 青洲步拾蘭苕春』

一一 東指羲和能走馬

一二 海塵新生石山下』

○二 〔天河 夜転じ 廻星を漂わせ〕 ・漂廻星 謝朓が「星天を廻る」(黒帝歌)というような星。文

苑英華は、漂を「杓」とし、廻を「回」とする。

○三 〔銀浦の流雲 水音を学ぶ〕 ・銀浦流雲 銀河の渚を流れる雲。 ・學水聲 銀河も雲も音をたて

ないが、見ていると水音の感じがするのを、「学ぶ」模倣する、といっている。このような感じを歌つ

たものは空前で、すぐれた表現として、たいへん有名になった。

○三 〔玉宮の桂樹 花 未だ落ちず〕 ・玉宮 月中の宮殿。月には桂樹(木犀)があるというが、これ

ももとより人間世界の木のように花が落ちたりはしない。

○四 〔仙妾 香を採り 珮纓を垂る〕 ・仙妾採香 仙妾は仙界の女性、採香は香草を採集する。文苑英

華は「仙姿綵女」とする。採を毛氏本は「采」とする。・垂珮纓 帶玉のように腰に飾る。珮を朝鮮本は「佩」ととする。纓は句袋だという説もある。・仙女がたくさん歩いているので、人間世界から昇天したひとのことを思い出して聞いてみると、その方なら北窓でしよう……。

○五〔秦妃 簾を巻けば 北窓 暁け〕・秦妃 秦の穆公の娘の弄玉うづぎよ。神仙伝拾遺によると、蕭史しょうしという簫の吹奏に巧みな美青年がいてその音は鸞鳳のようであった。弄玉も簫を吹くので穆公は二人を結婚させた。十数年たって弄玉の吹奏も鳳の声のようになり、鳳凰が来てその家に止まった。さらに数年のち弄玉は鳳に、蕭史は龍に乗って昇天した（太平広記四）・巻簾 文苑英華は「捲羅」とする。

北窓 文苑英華は「八方」とするが誤り。牕は、窓や窗の異体字。子夜歌に「枕を攬って北窓に臥す」といい謝朓が「孤桐北窗の外」（遊東堂詠桐）とうたう。天上に昇った弄玉が、眠りから覚めて、簾を巻くと北の窓は明け方になっていた。そして窓の外では。

○六〔窓前の植桐しよくとうに青鳳小なり〕・植桐 植を文苑英華は「食」とする。それなら桐の実を食べている。桐を朝鮮本は「桂」とするが、誤り。・青鳳 まだ幼くて羽の青い鳳凰。・秦妃のことはわかった。もうひとりの男性の昇天者は……。

○七〔王子 笙しょうを吹き 鷓鴣がかん管長し〕・王子 王子喬。列仙伝によれば、周の靈王の太子で笙の吹奏を好み、鳳凰の鳴き声そっくりだった。嵩山で道士について三十余年修業し、のち仙去した（太平広記四）王を錦囊集は「玉」とするが、誤り。・その王子喬が、天上でもやっぱり笙を吹いている。しかも鷓鴣鳥の首より長い管のついた笙を。まるでチロルの牧童だなどからかうと。

○八〔竜を呼び 煙を耕し 瑤草ようそうを種う〕・瑤草 仙界の草。江淹「瑤草正きんせきに翕あつ穂ほ」・天上といつて

も、仏教の極楽と違って、労働が必要でね、といって、龍をよび、そいつに犁をつけて、手下の仙人どもを使って、もうもうと煙る雲を耕し、宝石の草を栽培し始める。天上は永遠かと思つたが、なかなかそうではなくて、出会う連中は片っ端から消えて行き、場面がくるくる変わる。つられてつい、歌うちらの詩の脚韻も換わってしまう。東方朔「瑤華を拾わんと相期す」(与友人書)

○九 「粉霞の紅綬 藕系の裾」 ・粉霞紅綬 朝焼けをそのまま織って仕立てたような紅の綬。ここの天女は仙界の官吏だから官職を示す印綬を帯びている。なんだか人間世界の皇帝の女房や妾どもみたいじゃないか。しかしさすがに：：： ・藕系裾 蓮糸で織った純白のスカート。天上の仙人のつけるものだからみな人間世界のものとは違う。

○一〇 「青洲を歩みて拾う蘭苕の春」 ・青洲 東方朔が著わしたとつたえる海内十洲記によると、西王母が武帝に教えた仙界には十洲あり、その一つの長洲は別名青丘である。仙草や靈薬が多く、仙女たちがよく遊びに来るといふ。 ・蘭苕 蘭の花。仙界に遊ぶ詩を書いた郭璞が「翡翠蘭苕に戯る」(遊仙)と歌つたが、仙女も蘭の花を摘んでいる。人間世界でいえば春景色といったところ。「蘇小小歌」(一〇二〇)参照。

○一一 「東を指させば 羲和 能く馬を走らせ」 ・東指 春といえば方角では東だからそちらを指さして見ると、日輪の御者の羲和が駆け登ってくる。なかなかうまいじゃないかと思つているうちに、たちまち何億年かが過ぎ去って：：：。

○一二 「海塵 新たに生ず 石山の下」 ・海塵 海が干上がり、あらたに生まれた陸地では岩石の山のあたりで砂塵が舞い上がっている。この句を文苑英華は「海雲初生石城下」とする。

母の所へ行こうと八時に家を出た。石山駅に着くとバスは出た後で、次のバスまで四十分くらいの待ち時間がある。瀬田まで歩くことにして、駅からまっすぐ瀬田川の畔へ出た。三十年くらい前に琵琶湖岸が埋め立てられて、浜大津のほうから膳所、栗津をへて、螢谷まで湖岸道路がついている。JRの鉄橋のあるあたりは栗津からずっと水際が入り込んでいたために、道路よりまだ先のほうまで埋め立て地があり、料理旅館などが建っている。時間に余裕があったので、湖岸道路を行かずこの先行き止まりと立て札のある料理旅館の前の道を川岸のほうへ入っていった。水際まで行くと左手に船溜まりがあって川船が何隻かつないである。この船に乗って瀬田川の魚を料理して食べさせるというこららしい。

旅館の建っている地面より一メートルほど下へ石垣を降りると芝地がずっと川に添っていて、水際には巾一メートル足らずのセメントの道が帯のようについている。釣り人の歩く道だろうか、芝草を刈っている人があり、芝生におかれたベンチに座って新聞を読んでいる人がある。釣りをする人は始めたばかりのようで、竿を立てて、何かうろうろして準備をするらしい。道路のほうからは、建物の裏になっていて気づかなかったが、川を眺められる位置に小さな喫茶店がある。早朝あすこに座って大きな川を見渡しながらコーヒーを飲んだらさぞ気持ちがいいことだろうと、ちょっとロマンティックな気分にもさせられた。

国道一号線の橋の下の向こうに鳩の群がっているのが見えた。近づいてみると、植え込みの陰のベンチに座って、パンをちぎって、鳩にやっている人があるのだった。少しずつちぎって投げるので、すぐ傍まで鳩が寄って、手のパンをつつこうとさえするのに、その人はかまわずゆっくりとちぎっては投じているのだった。自転車に乗

って犬を走らせている人が二人、細い通路を川上のほうへ行った。ことしは春に雨が多かったせいかな瀬田川は水がいっぱいで、かがんで手を伸ばせば水にとどく。ところどころ、護岸ブロックのすき間に生えた葦がゆれている。のぞいてみるとブロックに水垢がたまり、カワニナがたくさんついている。唐橋の近くにある黒鉛工場は、わたしが小学生の頃に見学した時のまま、少しも変わっていない。がらんとした入口とその内部まで見えて、何人かの人が仕事をしている。唐橋の小橋の下の陸の上に赤いモーターボートが乗り捨てられていて、中に雨水がいっぱいたまっている。ハンドルの前の運転席の紫がかかった赤い椅子が、後へのけぞるように倒れ、その上まで水がついて、柳が生えていた。かなり長い間、放置されているのだろう。片づける方法がないのだろうか。

このあたりで、わたしは唐橋のほうへ上がって行った。上に立って見おろすと、ちょうど石山寺から浜大津港へ行く定期船が下を通り抜けたところだった。わたしは高校から後、何年もこの橋を毎日渡って学校へ通った。今の橋は新しくなって、少し巾も広くなっているけれど、位置は変わらない。田舎の中学校からその高校へ行ったのは女子ではわたしだけだったから友達がなかった。ただ、小学校の時に、戦後、朝鮮から引き揚げて来てしばらく同じ学校にいた人と出あった。その人はまもなく、栗津の湖岸に建った公営住宅に移って行ったのだった。わたし達はどちらも、特に誰かと一緒にいたいと求めるような性格ではなかった。授業も同じ時間を選ばなかったし、クラスも一度もいっしょにならなかった。それでも出あうとなつかしくて、学校の帰りに電車を途中下車してその人の家へ行ったことがあった。その住宅からはすぐ湖岸に出られた。

その人に、夏目漱石の『三四郎』を読んだかとたずねられて、わたしは初めて文学というものを知った。子ども用の本でシェイクスピアやメーテルリンク、名作文庫など多く読んでいたけれど、どれもみんなただのお話だと思っていたような気がする。その人は大人の男女の関係についてとても嫌悪しているようで、その頃の流行歌

に「お富さん」というのがあり、その歌の詞がいやらしいから嫌いだと言った。そういう言い方で、自分の嫌悪していることがらを説明しようとしたのだろうけれど、まだ少年少女名作物語に夢中になっていたほどのわたしには、どういふことかよくわからなかった。その頃からわたしも図書室で借りて文学書を多く読むようになった。高校を卒業する前に、その人が、思い出に写真を撮りに行こうと言ったので、石山の写真館に行つて二人で撮ってもらつた。その人が椅子に掛け、傍にわたしが立っているモノクロの写真で、今もそれはわたしのアルバムに残っている。その後、二人は別れて出あうこともなかったが、わたしが遠くへ下宿して学校に勤め出した頃、その人は結婚して九州へ行つたと聞いた。行く前に会いたいと言われたが、遠くにいるわたしに連絡できなかったと、妹が言つた。

最近、その頃と同窓会の案内が来るようになり、その人に会えるなら行つてみようかと考えていた。昨年、同窓会名簿が送られてきたので開いてみると、終りのページに亡くなった人の名前が四十人ほどもあり、その人の名前もその中であつた。なんといふことかと胸が痛んだが、同時にやはりといふ氣もした。「お富さん」が嫌いだといふ、結婚などしたくないと言つたが、後になつて考へてみると、それは単に思春期の潔癖性などというものではなかつたといふ感じがした。決して妥協しない、できないようなものを持つてゐる人だつたから、九州へ行くとき聞いたときになんとなくただならぬものを感じたのだけれど、自分の忙しさにかまけて、連絡をしなかつたことが悔やまれた。今になつて、この人の死についてたずねてみても何の役に立つだろう。

瀬田川は春からの雨をいっぱいに湛えてゆっくりと流れている。わたしはこの瀬田川がはらんして、そこに渡された板の橋の上で立ち往生する夢を繰り返してみてきた。そのようなことが現実には一度もなかつたのに何故なのか、意味はわからない。近頃では瀬田川の夢も、夢というものを見ることがあまりなくなつた。

故郷の夜

1995 06 16

原 田 慶

夕暮れ

見知らぬ犬が歩いてきた
村の丘の上まで来ると

犬は立ち止まって

ゆっくりと首を巡らした

その先は墓地で

まわりは山だったのだけれど

宅地を造るために

山膚をけずって棚のように

組み立てているところだ

今日の仕事を終わった

大きなトラックとショベルカーが

一列に並んで止まっている

わたしはむきだしになった墓地の入口に近づいて

少し傾いたりしながらこちらを見ている

たくさんの墓に手を合わせ

引き返して丘の上のまわり道を

深く掘り下げられた排水溝にそって歩き出した

犬は立ち上がろうとせず
前足にあごをのせ腹ばいになって
村を見つめている

ツバナの穂がいっせいになびき
白いホタルブクロが揺れ

赤と黒の雲が西の空にまんだらを描いて
陽が沈むと

底に押しひしがれたような村の家が
暗くすすけて見える

梅雨寒むの田に
稲の緑はようやく濃く

水の面に空を写して
夜が近づいてきた

ハナウツギの生け垣に灯がもれる家は
幼いころの友がなつかしくて

足を止めたけれど
ひっそりと動くものの気配もなかった

こんなにも静かに夜はすべてを
包みこむ力を持っていたのだ

それにしても遠い日の夜がもっとみずみずしく
透き徹っていたような気がするの

わたしが若かったせいだろうか

草が匂いたち

人や動物達が薄闇のなかで

影のように動き

煙は青く子どもの声がひびき

夜露が光り

川は音をたてて流れる

ただ黙っているだけの闇は

夜ではない

わたしがやすんだ後で

庭にホタルが来たと

母が言った

わたしが連れて来たのかと

思ったと

※前号正誤

第一六七号 三頁一七行 空しく飛ぶ↓空しく自ら飛ぶ 四頁七―八行 盧姫少年↓盧

姫少小 九頁一〇頁 劉孝義↓劉孝儀 一八頁一行 白雲上↓青雲上 二〇頁一二

行 屈原の↓屈原あるいは宋玉の

※第一七一号一頁で「緑紙祈禱文」を旧注により李賀の代作としたが、荒井健氏が「道士の夜祭を李賀が客観的に描いただけの作」との意見を寄せられました。有力な一説として、紹介します（原田憲雄）